

鉄斎

粉本展

会期

5月10日(水)

7月2日(日)
月曜日休館



鉄斎の粉本について

粉本という言葉は、今では耳馴れぬ語彙の一つであり、加えてその内容規定も曖昧なので、その都度解説を要するのだが、これに代る適当な用語がないところから、依然として古人の「手本」や「下描き」或いは「模写」のようなものを包括的に指している。ふつうは墨色で簡単に物の形を写しとり、彩色は少なく、時には「色さし」を指定したりしておく、といった体裁のもので、いうまでもなく完成された本画とは一線を劃するものである。

それらの発生は多分画稿を得るための手段であったろうが、明の董其昌が、唐の王維以下の古典的作品を数多く写しとって手本とし、それを秘伝としたという事が伝えられ、これを以て「臨模の粉本となす」とした。臨模とは対象を前に、フリーハンドで写したり、あるいはしき写したりすることだが、この場合の粉本の字義は、明らかに手本ということになる。つまり董其昌が古えの名作を写し、これをまた後学者が写したという順序となる。このあたりの事情は、去る昭和62年の当館の「粉本展」の展示の時にも言及したが、あえて今少し重ねていえば、我が国では江戸時代



16 観音菩薩像

の狩野探幽が遺した「探幽縮図」がこれに当る。探幽は当時の名画を意欲的に博覧し、これを模写して、やはり後学の便とした。探幽の目的は、自分自身の古画の研究や画技の修得もあつたらうが、董其昌同様、かかる名画を後日の参考とし、諸流を識ることによって一門の画技の向上を促すという、立場上からの必要性もあつたらうと推察される。いずれにせよ百の抽象的な画論より、具体的かつ直接的な理解のためには、これらの粉本が果たした役割はきわめて重要であつた、ということが

できる。

さて富岡鉄斎生涯の画業をふりかえると、世に文人画家とは称せられるものの、その様式に至ってはきわめて多様な画法を己れ自身のものとし、いわば鉄斎流としかよべないような独特の画境を展開しているというのが定評である。それは現代においては既に多くの人の認めるところであり、そのあたりに鉄斎の魅力の一面があるの



24 群鶴図

だが、その画技の修得のために、鉄斎はまた、鉄斎ならではの経過をたどっている。よく知られている鉄斎の語録のなかに「わしは別に誰という師事した人はない、いわば寺院や諸家にある名画で盗み稽古をやったのだ」という言葉があるが、事実、ごく若い頃を除いて、いわゆる師匠について画技そのものを教わるということは絶えて無く、その履歴をみれば判るように、前半生は学者であり神官職であった生活が主体で、本格的に絵画に取り組んだのは後半生、それも京都へ帰り居を定めてからであった。したがって「寺院や諸家にある名画」をみて稽古したというのも、多くは京都を中心に存在したそういう作品が対象であって、年代からいうと明治15年頃、鉄斎47才以降にそのような生活に傾いたものと考えられる。それはその後の鉄斎作品が展開する様式上の特質や主題などが物語るところでもあり、ここにいう鉄斎の遺した粉本類が、まさにそうした頃の労作に当る。例外は当然あるとしても、相当部分が該当すると考えていいだろう。



38 山水図

このような鉄斎の経験は、画をなす為の手段として、後年の次のような言葉に集約されている。すなわち「古名人の真蹟を熟覧の余、其の真蹟の臨模を能くすべし。臨模し

て古人の画格筆意を研究し、その画の位置は自己の胸中より組織すべし」と。鉄斎作品の画因については種々の要素が挙げられ、特にその精神的な契機については既に論を俟たないが、作画の法としては、やはり「古人の画格筆意を研究」するため臨模に励んだことが知れ、その秘められた努力の集積に、今日、我々はまたあらためて遭遇する。そして師を持たぬ鉄斎が、とりわけ多方面な範囲にその目を向け、ありとあらゆる先行作品を——いいかえればおよそ古画の目に触れる範囲は常

に逃さず、これを学びとって行ったと思える足跡を目のあたりにするのである。

展示に則してそれらを分類すれば、まず人物画——それは多分に日本の肖像画の名作を含みながら夥しい数にのぼるのだが——については、上は天皇宸影、高僧の頂相から戦国武将、忠臣、そして文人墨客、あるいは無名の職人等に至るまでが登場し、筆者もまちまちながら、実は鉄斎はそのような肖像画をひたすら蒐め続けたことを自ら語っている。それは歴史上の大人物、忠孝の臣、風流隠者の人



59 大雅堂旧棲位置図

々で、そのような人格に鉄斎はとりわけ敬意を払い、評価を与えたことが知れるが、一方、美人画や風俗画などにも手を染めているので、結局鉄斎の興味は、その都度拡大され、絵画の持つ広い世界やさまざまな描法へと向かい、加えて無類の向学心や好奇心が、これに拍車をかけて、多くの人物図の粉本を生んだのであろうと思われる。人物画ではないが、いわゆる仏画の範疇にはいるものとしては、羅漢像と観音像が多く、やがてそれらは鉄斎芸術の重要な一面となった羅漢・観音の名作に生まれ変わったことが知れる。



76 売茶翁図

鳥獣・花卉に至っては、それがどの

ような原本から採られたか不明なものも当然多いとしても、花鳥画そのものの作のあまり多くない鉄斎を思えば、それらの一木一草、そして一毛一織は、多くは他のテーマの作の背景や点景に消化されていった。が、何といてもこの分野は写生派の名手が先達に多く輩出したこととて、応挙、若冲など、その絵画として指向するところがおよそかけ離れる流派の技をも自己のものにせんとした姿勢が如実に窺えるのが面白い。

山水画が比較的少ないのは意外ではあるが、その代り中国の大家、或いは日本の名家などの作品をそのまま模写した作もあり、今後原本との照合など興味ある問題が牽き出せそうに思える。その他原本はよくわからないが忽卒の間の略写と覚しきもの、反対に対象物の由来や逸話、あるいは史実などをこまかく註記したものなど、単なる画道精進だけではない、やはり鉄斎らしい学問的関心を大いに発揮したものもあって、我々としては多分に応接にいとまがない感さえ抱かせられる。



82 葡萄図

いずれにしても、今後これら模写、下絵、稽古、覚え等のすべてを含んだ「鉄斎の粉本」の実体がますます解明され、特にその原本と、そして本画との関係が顕わになればなる程、鉄斎芸術の成立にまた一段と理解が深まり、光彩が添えられるものと期待される次第である。

(村越英明)

《出品目錄》

番号	題名	年令	本紙寸法	材質・彩色	形状
1	漢織吳織二女像	不詳	21.0×25.8	紙本墨画	台紙貼
2	板倉勝重像	不詳	55.0×32.0	紙本淡彩	掛軸
3	印度史銅版画(2枚)	不詳	(各)28.0×39.0	紙本墨画	台紙貼
4	蝦夷人物图	不詳	79.0×27.0	紙本淡彩	掛軸
5	惠比須像・烏图	不詳	27.2×38.8	紙本墨画	台紙貼
6	織田信長像狩野元秀筆	不詳	38.0×26.7	紙本墨画	掛軸
7	海鶴蟠桃图沈南蘋筆	50代	107.5×45.0	紙本淡彩	掛軸
8	柿本人麿像伝藤原信実筆	不詳	88.0×38.0	紙本淡彩	掛軸
9	笠殿神社略图	不詳	14.0×46.8	紙本墨画	扇面台紙貼
10	歌仙图(7枚)	不詳	(各)30.5×25.0	紙本淡彩	台紙貼
11	加藤清正像中川寿林筆	不詳	27.0×37.0	紙本淡彩	掛軸
12	蟹上桂・吉野広東图	不詳	39.0×27.0	紙本淡彩	掛軸
13	鴨岩觀音图	不詳	39.0×27.5	紙本淡彩	掛軸
14	岩觀音像	不詳	39.0×27.0	紙本墨画	掛軸
15	管夫人像渡辺華山筆	不詳	118.2×65.5	紙本着色	掛軸
16	戲畫	不詳	54.0×39.0	紙本着色	卷子
17	玉堂肖照谷文晁筆	不詳	24.8×96.4	紙本着色	卷子
18	漁樵图谷文晁筆	不詳	26.5×17.6	絹本墨画	台紙貼
19	魚籃觀音图	不詳	77.0×51.0	紙本淡彩	掛軸
20	騎驢雀图足利義満筆	50代	130.3×74.0	紙本淡彩	掛軸
21	孔群鶴像	不詳	55.8×47.0	紙本墨画	掛軸
22	孔群鶴像	不詳	102.0×38.0	紙本着色	掛軸
23	群馬・人物图	不詳	27.0×38.2	紙本着色	台紙貼
24	繫狗子图	不詳	118.0×54.8	紙本淡彩	台紙貼
25	狗子图	不詳	39.2×44.5	紙本着色・墨画	台紙貼
26	獄中图	不詳	27.0×38.6	紙本墨画	台紙貼
27	兒島高德像	不詳	27.4×38.4	紙本着色	台紙貼
28	兒島高德图	不詳	28.0×39.0	紙本淡彩	台紙貼
29	五祖荷鋤图牧原隆信筆	不詳	106.8×43.5	紙本淡彩	掛軸
30	小松内大臣像	不詳	39.7×27.4	紙本墨画	台紙貼
31	小濃像	不詳	66.0×31.0	紙本淡彩	掛軸
32	瞽盲图	50代	136.0×112.0	紙本淡彩	掛軸
33	山陰脩禪图	不詳	79.0×30.9	紙本淡彩	掛軸
34	山山水水图	不詳	53.0×39.0	紙本淡彩	掛軸
35	山山水水图	不詳	136.2×48.0	紙本淡彩	掛軸
36	山山水水图	不詳	128.0×56.0	紙本淡彩	掛軸
37	三宝山院男色图	不詳	126.3×60.2	紙本淡彩	掛軸
38	芝仙竹寿图	不詳	80.0×53.0	紙本淡彩	掛軸
39	积寂光寺本因坊日海像	不詳	28.0×39.0	紙本淡彩	台紙貼
40	秋景山水图汪葑筆	50代	110.0×33.6	紙本淡彩	掛軸
41	十寿星图	54	83.8×39.4	紙本淡彩	掛軸
42	寿星图	不詳	51.0×84.0	紙本墨画	掛軸
43	老鏡人治图	不詳	190.5×106.3	紙本淡彩	掛軸
44	小深人物图	不詳	(各)89.8×44.9	紙本墨画	掛軸
45	深人物图	不詳	99.0×51.0	紙本淡彩	掛軸
46	人人物图	不詳	38.5×26.8	紙本墨画	台紙貼
47	菅原道真像	不詳	53.9×115.6	紙本墨画	掛軸
48	西洋医祖秘父画像	不詳	145.5×55.0	紙本淡彩	掛軸
49	青屋寒林图	不詳	138.5×54.0	紙本墨画	掛軸
50	雪扇面寿字图	不詳	54.0×39.0	紙本墨画	掛軸
51	雪扇面寿字图	不詳	78.8×54.6	紙本墨画	掛軸
52	雪扇面寿字图	不詳	54.0×39.0	紙本墨画	掛軸
53	雪扇面寿字图	50代	116.0×38.5	紙本淡彩	掛軸
54	雪扇面寿字图	不詳	95.9×63.5	紙本淡彩	掛軸
55	雪扇面寿字图	不詳	127.8×60.0	紙本淡彩	掛軸
56	雪扇面寿字图	不詳	27.8×39.7	紙本墨画	台紙貼
57	雪扇面寿字图	不詳		紙本墨画	台紙貼

番号	題名	年令	本紙寸法	材質・彩色	形状
58	蔬菜 図	不詳	38.5×26.8	紙本墨画	台紙貼
59	大雅堂旧樓位置 図	86	56.0×62.5	紙本墨画	掛軸
60	戴溪堂 図	不詳	37.5×27.4	紙本淡彩	台紙貼
61	大乘院宮尊円親王像	57	47.7×62.6	紙本墨画	掛軸
62	大嘗会 図	不詳	100.2×35.8	紙本淡彩	掛軸
63	達磨騎牛 図	59頃	80.0×38.0	紙本着色	掛軸
64	達磨 顔輝筆 図	不詳	53.0×38.0	紙本淡彩	掛軸
65	達磨 司馬江漢筆 図	不詳	122.8×78.1	紙本淡彩	掛軸
66	着色山 水 図	不詳	106.0×38.7	紙本着色	掛軸
67	中宮寺曼陀羅 図	不詳	28.0×39.0	紙本着色	台紙貼
68	陶淵明像	50代	79.1×38.7	紙本淡彩	掛軸
69	東坡笠屐 図	不詳	38.2×26.6	紙本墨画	台紙貼
70	東方朔像祖石筆	不詳	70.0×46.8	紙本墨画	掛軸
71	遠山衲衣略 図	73頃	54.6×92.0	紙本淡彩	掛軸
72	曼鸞焚仙經 図	不詳	81.0×50.0	紙本淡彩	掛軸
73	中長林竹洞 像	不詳	41.9×29.5	紙本淡彩	台紙貼
74	長刀 鉾 図	不詳	38.8×27.1	紙本墨画	台紙貼
75	鶏 図	不詳	28.0×39.0	紙本着色	台紙貼
76	壳茶翁 図	不詳	61.7×59.3	紙本淡彩	掛軸
77	芭蕉像・利休像	不詳	26.9×37.3	紙本墨画	台紙貼
78	花かつみ・燕 図	不詳	28.0×39.0	紙本着色	台紙貼
79	比叡山僧兵 図	不詳	84.0×107.0	紙本墨画	掛軸
80	雛屋立圍 像	不詳	43.6×28.0	紙本墨画	台紙貼
81	葡萄 図	不詳	114.0×57.7	紙本淡彩	掛軸
82	葡萄 日観筆 図	不詳	38.8×53.2	紙本墨画	掛軸
83	米元章 像	不詳	27.0×24.7	紙本墨画	台紙貼
84	蓬萊山 図	不詳	148.5×71.2	紙本淡彩	掛軸
85	法隆寺壁画(2枚)	不詳	(各)28.0×39.0	紙本着色	台紙貼
86	松永貞徳柿園故跡 図	50代	51.3×59.3	紙本淡彩	掛軸
87	猛虎 図	不詳	78.8×53.5	紙本墨画	掛軸
88	山崎烈士酒宴 図	不詳	53.0×39.0	紙本墨画	掛軸
89	遊女 図	不詳	106.6×38.8	紙本着色	掛軸
90	養老勅使 図	50代	131.5×42.5	紙本淡彩	掛軸
91	芳野山 図	不詳	27.0×38.2	紙本墨画	台紙貼
92	頼朝像 藤原隆信筆	不詳	54.0×31.0	紙本淡彩	掛軸
93	龍 図	不詳	82.8×40.0	紙本墨画	掛軸
94	吕恭大行山中採芝 図	不詳	126.4×67.8	紙本墨画	掛軸
95	吕洞 寶 像	不詳	117.0×54.0	紙本淡彩	掛軸
96	鷲 図	不詳	54.0×39.0	紙本墨画	掛軸

25. 30. 36. 38. 43. 48. 49. 50. 55. 56. 61. 65. 76. 79. 94

京都市美術館蔵

出品作品は下記の通り二回にわけて展示いたします。

但し一部作品は重複することがあります。

前期 5月10日(水)～6月4日(日)

後期 6月6日(火)～7月2日(日)